

筆者が砺波郡旧庄下村の兵事書類を実見した限りでは、昭和十二年以降、複数回にわたり在郷軍人の技能調査の指示が出され、また壮丁に対しても昭和十七年以降記入書類に変化が見られる。その内容は主に、壮丁が持つ技能を詳細に把握しようとするものである。この様に、平時においては割りの良い職種であった筈の特業が、戦時においては逆に召集・動員の引き金になった。

以上、特業について軍体内での「割り」と広義の社会化という二点から検討した。尚、特業については引き続き調査中である。また今回、本報告の機会をお与え下さった鶴見太郎先生、兵事史料調査でお世話になった砺波郷土資料館の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。

日本古代における災害認識の変遷

山口 えり

日本古代における災害の中でも、旱害・水害が起きたときの対応に注目し、災害が起きたときに、特に為政者がどのような対応をし、災害の原因をどのように認識したのか、その変遷と背景について検討した。

旱害や水害が発生すると、まず祈雨儀礼が行われた。神社に奉幣したり、寺院で読経したりという対策を行っても、効果が感じられなかったと判断された場合には、災害は「災異」となり、その災異

を引き起こした原因が求められた。その動向を整理すると、原因は、「不徳」から「祟」、そして「理運」へと変遷する。

旱害・水害の原因が初めて言及されるのは『続日本紀』慶雲二年（七〇五）四月三日条である。律令国家の形成とともに、天変地異は為政者の不徳失政による天譴とする天命災異思想が中国から導入された。だが、日本では王（天皇）が変わり得るとの思想をそのままの形で受け入れることはできなかった。

そのため、平安期以降に明確となる怨霊信仰の広がりとともに、災害の原因は「祟」に求められるようになった。その結果、祟りをなす山陵や神の慰撫のため、儀礼を行うことが重要となった。祈雨儀礼の種類は増加し、例えば神社に対しても読経を行うなど個別の宗教の枠組みを超えた複合的な儀礼も行われた。同時に、九世紀には火山噴火などの自然災害が多く発生したため、災害を予め防ぐことに重点がおかれるようになった。そして、九世紀中葉以降には、災害の「予防」を主眼とした報告が陰陽寮から上申されるようになった。

だが、「祟」を「予防」することは不可能であり、「不徳」と「祟」だけでは災異の発生は十分説明できなかった。そこで、陰陽道に裏付けされた「理運」に、災異の原因を求めるようになるのである。「理運」、つまり天体の運行という一定の原因があり、その結果として災異が起こるとの明解な論理は、平安貴族たちにとって説得力を持つものであった。災異の原因を特定の人や神などから、人の力の

及ばない天体の動きへと変化させることで、執政者の政治責任は回避されるようになったのである。

従来の研究では「理運」という語が注目されることはなかった。

日本における「理運」の初見は、『日本三代実録』貞観十年（八六八）十一月十五日条である。ここでは、「五行之理運」・「三合之理運」といった言葉をもって、災異の予告が行われている。五行や三合は、『五行大義』など、他の文献でも見られる用語である一方、「理運」は『五行大義』はもちろん、『易経』・『周礼』・『天地瑞祥志』などにもみられない。しかし、「理運」という言葉自体が中国文献に全くみられないわけではない。中国での用例を検討すると、「理運」とは、道理にかなったためぐりあわせや運であり、変革の因果関係を説明する語である。しかも、全体的に吉事に使用されており、災害の原因を示す用語としては使用されていない。だが、貞観年間以降の古代日本では「理運」は、災異が起きる原因として、人の力ではどうしようもない、当然あるべきめぐりあわせといった意味合いで使用されている。元来、陰陽寮の用語で、こうした意味を有するのは「三合歳」であった。三合とは、木星と金星と月の三つの天体が天空の一箇所に集合すると考えることであるが、『黄帝九宮経』によれば、三合の歳には水害・旱害や病が起りやすいとされていた。三合歳はほぼ九年に一度訪れるが、災害は本来的には天体の運行とは関係ない。よって、「三合」に当たらない年にも当然、災異は起きた。

そこで「理運」を検討してみると、日本では三合歳に当たらない年に、災異が起きたことを説明するために、「理運」が使用されたことがわかった。日本における「理運」は、中国における一般的な使用法とは異なり、貞観年間以降の陰陽道の隆盛と共にうみだされた日本独自の使用法であることが確認できた。

「理運」の重視に伴う陰陽寮の権限の増大は、五龍祭のような陰陽寮による祈雨儀礼の増加だけでなく、災異の原因をいかにして特定するかという観点からも確認できる。本来、災異の原因を特定するのは神祇官が中心で、その亀卜では、災異が祟によるものかどうかのみを判断していた。だが、貞観年間以降は、陰陽寮も災異の原因を占うようになり、やがて十世紀になると、陰陽寮も災異の原因を「理運」以外に、神祇官の担当していた祟りにも言及するようになった。「理運」のさらなる定着に伴って、神祇官は、十世紀中葉には、陰陽寮の「理運」を取り入れ、「理運之上、祟」という表現を用いて、災異を発生させた原因を認識するようになった。

災異を発生させた原因は変遷するが、「不徳」は史料からほとんど見られなくなる一方で、「祟」と「理運」は合わせて認識されるようになる。そして、災異の原因を「理運」に求める場合でも、災異を防ぐには為政者の徳が重要であり、その認識は水面下では残っていたことがうかがえる。

中世以降、「理運」は中国と同じく、吉事に使用されるようになる。「理運」の使用方法の変化については、今後の課題としたい。